

別府大学国語国文学会小史（一）

古庄 ゆき子

別府大学国語国文学会は一九六一（昭和三十六）年二月に設立された。三十三年前のことである。三十三年は赤ん坊を中年の男女にする時間である。しかもこの時間はわたしたち日本人のかつて経験したことのないなかつた激変の時代であった。大学のあり方、学問のありよう、学生気質も大きく変わった。私たちの大学の姿も昔を思い出すすがもなほほどになってしまった。当然国文学科のありかたも変化し、私たちの小さな学会も、そうした激動の中を浮き沈みしてきた。つねに発展し続けたというわけでもなく、沈滞した時期もあった。しかしこの間にも機関誌は（『別府大学国語国文』から『別府大学国語国文学』と名称をいささか変えはしたが）発行しつづけた。そして今回第三十五号を出すことになった。

いま改めて創刊号から三十四号までを並べてみて感慨ふかいものがある。これはよかれあしかれ別府大学国語国文学会のあるべきあり、別府大学国文学科の歩みである。

この会を設立された先生方はすでに亡くなられて久しい。第一期、会の活動にかかわり、後に他大学へ移られた方々も多い。会設立にかかわり、現在にいたっているのは私だけとなった。そういう立場の者の責任と義務において、この学会がどんな状況の中で、誰たちがどんな思いをこめてつくったものか、その後の各時期をどんな方々がどういう風に受けつがれたかを記しておきたい。

ところで三十三年にわたる本学会の歴史をふりかえってみると、発足時の一九六一年から六五年まで（仮りに第一期とよぼう）と、一九六七年から七二年まで（第二期）、一九七三年から八四年まで（第三期）、それ以降と区分できらうである。

今回は第一期、学会発足当時の記憶をたどってみたい。

第一期は、教師も学生も熱っぽく語り、行動した時期であった。文学とは何かとか、古典とは何かとか、どうすれ

ば学会の民主的運営ができるか等々……。まことに貧弱な教育、研究条件―小さい図書館に少ない本、冷暖房施設など全くない教室等々……にいて皆の志は奇妙に高かった。

学会発足の前年は日米安全保障条約改定の年で、反対運動が全国に燃え広がりを、社会全体が騒然としていた。政治的活動の弱かったこの大学さえもまたその例外ではなかった。そして一見何の関係のない国語国文学会も、その熱っぽい時代の空気の中で生み出された産物である。

大学は学問研究を命とするが、戦後設立された別府大学には一九六〇年当時、別府大学会だけがあって、機関誌『別府大学紀要』が年一回出版されているにすぎなかった。各専門分野別の研究会や発表誌など、まだ全く考えられていなかった。それに学生を含んだ研究と成果の発表の場をつくるという発想はさらになかった。

そうした中で国語国文学専門の学会設立を図ったのは、当時国文学科主任教授であった川島つゆ先生であった。

先生は小林一茶研究家で、この前年岩波書店刊日本古典文学大系五十八巻として『一茶集』（暉峻康隆氏の『蕪村集』と合して、『蕪村集一茶集』となつてゐる）を刊行されたばかり。教室の講義も真剣で、厳しかった。一九五〇年代には九州大学文学部国語国文学研究室を中心に設立された西日本国語国文学会に大分県委員の一人として参加しておられたし、全国的学会の俳文学会にも参加しておられた。学会設立構想はそうした活動の中から、国文学科の振

興策として浮かび上がってきたものであった。川島先生を支えられたのは大石新先生であった。永く高校の校長をされた方だが、村岡典嗣門下で『賀茂真淵』（柳原書店、昭和十七年）の著者でもあった。『解釈と鑑賞』の「学界展望」などに本学会機関誌がとりあげられたはじめは先生の「源氏物語における自然観」であった。実務は私が受持った。私は別府女子大学第一回卒業生（別府女子大学は二回生卒業で終わり、後男女共学となる）なのだが、卒業後学校へ残り、川島先生の助手となった。一九五五年四月から法政大学へ国内留学、西郷信綱教授の教室で学んだ。幸いにもこの時期西郷先生等の日本文学協会がめざましく活動をしていたところで、私は西郷先生の教室、そしてその学会の活動からも大きな刺激をうけた。一九五八年四月、別府大学に復帰。川島先生の国文学会設立構想に参画したり、学会設立のための実務を担当した。学会設立後は年々の研究発表会開催実務、機関誌『別大国語国文』、『国語国文学会報』の編集をした。

発足した別大国語国文学会の特徴は、国文学研究、国語教育研究の活動を単に学内の活動とせず、県下同学の土に門戸を開くという立場をとったところにある。つまり、学会活動を地方文化創造の仕の一環と位置づけていたのである。発足にあたっていち早く県下同学の土、県下高等学校国語科担任の先生方によびかけたのはそのためであった。学会設立の前年、実験的に国文学研究室主催の国語、国文

学研究発表会を開いた。

学会設立の年からこれを大会と称することにし、九大の中村幸彦教授に講演をお願いした。「近世的表現」と題する講演は鮮烈でわたしたちの目を開かせてくれた。前々年秋、北九大で開かれた第九回西日本国語国文学会で中村教授が「地方文化研究の提唱」を発表されて以来、ぜひ本学でご講演をという願いはあった。ところが学会設立の秋、太宰府で開かれた俳文学会の席上で川島先生は中村教授に直接依頼され、一週間後ならということで、突然実現の運びとなった。大会予定日の大巾繰上のため、わたしたちは徹夜作業して開催を可能にしたのだが、手づくりの喜びの方が大きかった。

ところで、当時県下の高等学校国語科の先生方は、すでに独自の研究組織を作っておられ、機関誌『国語大分』を刊行されていたのだが、われわれの学会発足には当時県教育庁におられた山本峯生、佐伯鶴城高校長田村守隆、日出高校長安東薫、宇佐高校長吉武秀、県立ろう学校長深田光の諸先生方が発起人に名を連ねて下さり、東豊高校（現大分東高校）加藤義夫先生が本学会評議員になって、会の運営に直接かかわって下さりもした。こちらも川島つゆ先生が高校側の研究会にまねかれて講演をするというようなこともあって、ゆるい友好関係と研究の交流の輪がつけられていったのである。本稿末尾に掲げた機関誌『別大國語文』に多くの高校の先生が寄稿されているのもそのため

ある。

こうした高校との研究を通してのつながりの輪をつくり出し得たのは、高校にながくいらっしやった大石新先生のお力によるところが大きかった。

次に掲げるのは学会発足に当たったの趣意書、参加よびかけだが、その当時の川島先生以下国文学科教員の考え方が示されている。

別府大学国語国文学会発足にあたって御挨拶とお願

今般、私どもは、別府大学国文学研究室を中心といたしまして、「別府大学国語国文学会」を発足いたしました。

私どもは、かねがね大分県内の国語国文学研究者、国語教育の現場教師等の研究上の交流や親睦を計る集りがほしいと考えてきましたし、他からの要望もあったのですが、今までそれが具体化する運びに至らなかったのがあります。

昨秋、ようやく機運を得まして、当研究室において試みに、研究発表会を催しましたところ、県内外の高、中学校の諸先生をはじめ、各位の御協力・御指導を得まして、予想外の成果を収めることができましたので、これをもう一步すすめて、恒常的な会にすれば私どもの初志にもとづく、全県的な国語国文学の研究者、現場教師の集りが出来るのではないかと考えまして、当会の結成を

計ったわけでありませう。

私どもの多くは、研究者・現場教師たるを問わず、国語国文学をもって後進たちを指導する立場にいるものであります。激しく揺れ動く現代社会の中で、こうした仕事をもった私どもの役割は、たとえば、古典をどうよませるかとか、国語国字問題をどうするかだけを考えてみましても明らかのように、重大であると同時に、極めてむずかしいもののように思われます。

非力な私どもですが、しかし、私どもが時代に責任をもって生きるためには、そういった事に目をつぶることなく、何とか私どもなりの解決の方法をつくり出さなくてはならないと考えるのであります。

三人よれば何とやら申しますように、一人一人がたとえ非力でも、そういった事を問題としている者が、一人よりも二人、二人よりも三人と集ることによって、お互いの考え方を深めあえるような気がいたします。

本会はこういったごくささやかな事を課題として発足するものであります。どのような成果があるかは、全く私どもの今後の活動による外はないのですが、急がずに確実に一歩一歩あるいて行きたいと存じます。

志を同じくする同学の皆さま多数の御指導と御入会を心からお願ひ申し上げる次第でございます。

昭和三十六年二月五日

発起人一同

学会設立、機関誌、学会報の発行と行動しはじめたのだが、これはかなりの経費を必要とする仕事である。教員、一般会員、学生会員に会費はきちんと納めてもらい、会計報告もきちんと行ったが、それで足りるものではない。学内ではじめての試みでもあったので、佐藤義詮理事長、学長と川島先生との度重なる話し合いの果てに、ようやく学校から補助金を得るようになって、会は活発に動きはじめた。次は川島先生の機関誌創刊号巻頭言である。

かどでのことば

川島 つゆ

大学が発足してから滿十一年経った。

そのあいだに 育つべきものは育ってきた

私たちは あせろうとはしなかった 欲ばろうともしな

かった

泉が 内から満ちあふれてくるような力で

今度このようなものが持たれた

いわば自然発生的なこの小冊子は、そのゆえに健康な花

を咲かすであらう

ゆたかなみのりがあるであらう

これは個々のたれのものでもない

ここに集る人々、集ってくる人々みんなのものだ

みんなして健康な花を育てよう ゆたかなみのりをたの

しもう

絶えることのない水脈のように
われわれの心のつながりと共に これは いついつまで
もつづいていくことであろう

われわれの窓をのぞいている扇山が 鶴見連峰が
青くなり ラクダ色になり 白くなり

また青くなり ラクダ色になり 白くなり
また青くなっていくように

(別大國語国文学会々々長)

この「小冊子」が「内から満ちあふれてくるような力」、
「自然発生的」力によるゆえに「健康な花を咲かすであら
う」と期待し、この「小冊子」にあつまるみんなで、「健
康な花を育て」「ゆたかなみのりをたのしもう」というよ
びかけは、学問、文化本来の姿を示すものである。

『別大國語国文』は第七号をもって終わる。一九六六年に
川島先生のご退任になり、松本義一教授があとを引き継が
れることによって、誌名、体裁が変わったからである。川
島先生のご退任を記念して学会は「研究論集―川島つゆ教
授退任記念号」を出した。ご退任に当たったの送別の儀式
いっさいを頑強に否定された先生が唯一つ許して下さった
方法であった。研究論集の中味は私の個人論文集であった。
一九五六年から一九六五年にかけて全国大学国語国文学会
機関誌『文学・語学』、日本文学協会機関誌『日本文学』
に掲載されたもので、当時、学内の若手による論集出版が
計画されており、その一号として用意されていたものであ

た。習作というべき論をまとめて先生のご退任記念とする
ことについて、当然批判もあった。私は『研究論集』の前
書きで次のようにかいている。

論集にはわたしの名を付したが、心としては多数の卒
業生全員それぞれの方々に代っているつもりであって、
単にわたし個人のものとは考えていない。僭越のそしり
は当然甘受しなければならぬが、学校が若いために然
るべき先輩もなく、勢、わたしごときがこの大役に当ら
ねばならなくなつた事情を汲みとっていただけなら望
外のよるこびである。
以下、創刊号から第三十四号までの目次を掲載する。

創刊号 昭和三十六年三月

かどでのことば

川島 つゆ (本学文学部教授)

落窪物語のモデル 南 隆 (中津南高校教諭)

独歩「鹿狩」をめぐる

秦 一行正 (本学文学部講師)

「堀川波鼓」お種小考

佐藤 逸子 (別府市立北部中学校教諭)

芭蕉における西行文学の継承と処理の問題

山口 保明 (宮崎県、山乃口中学校教諭)

芥川龍之介と今昔物語

椎葉 寅生 (国文学科研究生)

『徒然草』雑感

加藤 義夫 (県立東豊高校教諭)

『おらが春』をとおしてみた一茶という人

吉兼 賢次 (国文学科学生)

『夕鶴』の民話へのかかわり

和泉 澄江 (県立ろう学校教諭)

北山茂夫著『大化改新』

今永 清二 (文学部講師)

西郷信綱著『詩の発生』

古庄ゆき子 (文学部講師)

第二号 特集「文学教育」 昭和三十六年十月

文学教育について

大石 新 (文学部教授)

文学教育序論—その根底におくべきもの—

山口 保明 (宮崎県山之口中学校教諭)

実業高校における古典文学教授の在り方

日野 重之 (日田商業高校教諭)

中学校国語科に於ける陥没点

小野 豪儀 (河内中学校教諭)

座談会「教育実習を終って」

教生日記から

石坂の「学校物」 加藤 義夫 (県立東豊高校教諭)

「レモン哀歌」解釈

—高村光太郎「智恵子抄」より—

平井 基登 (都立大学大学院生)

近代詩ノート

椎葉 寅生 (国文学科研究生)

第三号 昭和三十七年八月

「菊花の契り」について

加藤 義夫 (県立東豊高校教諭)

落窪物語のモデル考

南 隆 (県立中津北高校教諭)

「佐渡に横たふ」について

藤沢 一雄 (宮崎県立延岡向洋高校教諭)

『地獄変』小考(上)

秦 行正 (文学部講師)

擬物語と社会相

後藤 重巳 (別大附属高校教諭)

村岡典嗣著『日本思想史概説』

大石 新 (文学部教授)

堀田善衛著『海鳴りの底から』

古庄ゆき子

(文学部講師)

井上清著『現代日本女性史』

今永 清二

(文学部講師)

古典答案に見える生徒の性格

日野 重之

(日田商業高校教諭)

日本古典文学とわたしの出逢い

山口 雄二

(宮崎県飯野中学校
鉄山分校教諭)

優秀卒論要旨

独歩作品論

吉兼 賢次

(宮崎県本庄中学校教諭)

林 美美子『浮雲』

岩崎 洋走

(鹿児島県田布施中学校
教諭)

第四号

昭和三十八年六月

国語の混乱

藤沢 一雄

(宮崎県立延岡向洋高校
教諭)

教材にあらわれた「妄想」とその問題点

奈賀 玲子

(県立東豊高校教諭)

私の古典文学教育論

古庄ゆき子

(文学部講師)

随想「旅へのねたみ」

日野 重之

(日田商業高校教諭)

芥川龍之介作品鑑賞(一)―「羅生門」―

秦 行正

(文学部講師)

国文学に関するアンケート整理

中村栄・黒木充生

(文学部講師)

第五号

昭和三十九年六月

賀茂真淵の五十連音について

大石 新

(文学部教授)

『青年』鑑賞―目のイメージを中心に―

平井 基澄

(文学部講師)

芥川龍之介作品鑑賞(二)―「戯作三昧」(上)―

秦 行正

(文学部講師)

「作品に恣意を持ち込まないで読む」ということ

―一首の歌の解釈をめぐる―

古庄ゆき子

(文学部講師)

大衆文学と純文学

加藤 義夫

(県立東豊高校教諭)

生活の歌

川島 つゆ

(文学部教授)

第六号 昭和三十九年十一月

芥川龍之介作品鑑賞(三) — 「戯作三昧」 (下) —

秦 行正 (文学部講師)

ことばに関する素人のノート

古庄ゆき子 (文学部講師)

良寛としらみ

川島 つゆ (文学部教授)

日本の漢字改革と文字の機械化

郭 沫若・二宮淳一郎訳

第七号 昭和四十年七月

宮沢賢治覚書 — 「銀河鉄道の夜」をめぐって

佐藤 泰正 (文学部非常勤講師)

「興津弥五右衛門の遺書」覚書 — その創作動機をめぐって

秦 行正 (文学部講師)

三十九年度学会報告

俳人長野馬貞研究 — その伝記的紹介 —

麻生 和夫 (玖珠郡恵良明厳寺住職)

高等学校における古典指導上の諸問題 (一)

山口 保明 (南九州短大国文学

研究室)

葦としての高校生立場 — ある高校教師の悩み —

多田 より (県立鶴崎高校教諭)

解け合いながら、浸ろう

日野 重之 (日田商業高校教諭)

土屋北彦著『大分県の民話』一・二集

古庄ゆき子 (文学部助教授)

別府大学国語国文学

第八号 昭和四十一年三月

『大閤記』研究序説 — 甫庵『大閤記』の方法 (上)

嘉部 嘉隆 (文学部講師)

ノート カツラギノヒトコトヌシノカミ

— その形象化の過程をめぐって — (上)

古庄ゆき子 (文学部助教授)

源氏物語における道德観

大石 新 (文学部教授)

牧水初期の作品(資料) — 短編小説『ふゆ草』 —

山口 保明 (南九州短大国文学

研究室)

『奥の細道』連句研究 — 「文月や」の巻 —

松本 義一 (文学部教授)

第九号 昭和四十二年十月

孟子字義疏証における「道」について

高橋 正和 (文学部講師)

万葉新採百首解について

大石 新 (文学部教授)

芭蕉連句研究―貞享四年「磨きなほす」の巻―

松本 義一 (文学部教授)

謡曲『葛城』の背後にあるもの

―カツラギヒトコトヌシのもう一つの顔―

古庄ゆき子 (文学部助教授)

『大閤記』研究序説 甫庵『大閤記』の方法(中)

嘉部 嘉隆 (文学部講師)

資料紹介

森鷗外「小説アンナカレニナ」(柴田流星抄訳)序文

秦 行正 (文学部助教授)

第十号 昭和四十三年十月

ノート大伯(大来)皇女

古庄ゆき子 (文学部助教授)

源氏物語における自然観

大石 新 (文学部教授)

『おくのほそ道』連句研究―「星今宵」の巻―

松本 義一 (文学部教授)

『大閤記』研究序説―甫庵『大閤記』の方法(中のⅡ)―

嘉部 嘉隆 (大阪樟蔭女子大学講師)

萩原朔太郎について―『アフォリズム』の―考察

黄金 一臣 (四十二年卒業生)

『鮫』の成立再論

首藤 基澄 (文学部講師)

孟子字義疏証と語孟子字義

高橋 正和 (文学部講師)

第十一号 昭和四十四年十月

鷗外「舞姫」の問題―その自伝性の限界をめぐって―

秦 行正 (文学部助教授)

『自然に、充分自然に』(伊東静雄)考

―伊東静雄ノート―

釘宮 久男 (大分工専助教授)

『鬼の児の唄』論―抵抗のアレゴリーを中心に―

首藤 基澄 (文学部講師)

「文学史を書くこと自体が、芸術作品を書くことと同じこと」であってよいか―三島由紀夫『日本文学小史』批判―

―特に万葉集評価を中心に―(一)

古庄ゆき子 (文学部助教授)

孟子字義疏証の立場—アンチ本来主義—

高橋 正和 (文学部講師)

源氏物語における栄華観

大石 新 (文学部教授)

紫式部論—生活圈と精神構造について—

園田 俣子 (庄内東中学校教諭)

『古今集』に見る犬和

松本 義一 (文学部教授)

『大閤記』研究序説—甫庵『大閤記』の方法(中のⅢ)—

嘉部 嘉隆 (大阪樟蔭女子大学講師)

第十二号 昭和四十五年十一月

高野素十研究「初鴉」—その背後にあるもの—

倉田 紘文 (文学部講師)

高群逸枝覚え書(一)

—その母系制研究を中心として—

古庄ゆき子 (文学部助教授)

『土佐日記』に見る大和

松本 義一 (文学部教授)

梅園哲学の源流

高橋 正和 (文学部講師)

首藤基澄著『金子光晴研究』を読んで

古庄ゆき子 (文学部助教授)

第十三号 昭和四十六年十二月

三浦梅園の哲学—程朱学的人性説批判を中心にして—

高橋 正和 (文学部助教授)

「ある女」論序説(一)

福本 彰 (文学部講師)

高群逸枝覚え書(二)—平安朝女流作家の位置づけをめぐる—

古庄ゆき子 (文学部助教授)

「子規と素十」—写生説の流れ—

倉田 紘文 (文学部講師)

第十四号 昭和四十七年十二月

源氏物語における仏教思想

大石 新 (文学部教授)

嗽石論ノート(5)「野分」の位相(F)

福本 彰 (文学部講師)

三浦梅園の研究—反観合一に関する定説を中心にして—

高橋 正和 (文学部助教授)

蕉門俳句研究—越人の一句—

松本 義一 (文学部部教授)

『なかぞらのいづこより』(伊東静雄詩)への注記

釘宮 久男 (大分工専教授)

奈賀 玲子 (市立別府商業高校教諭)

第十六号 昭和四十九年十一月

第十五号 昭和四十八年十一月

有明における詩様式の展開

米田 貞一 (文学部教授)

「羅生門」論(上)

—その虚構的在り様の意味と位相を巡って—

福本 彰 (文学部講師)

三浦梅園の研究—条理と反観合一について—

高橋 正和 (文学部助教)

去来抄・三冊子より考察した蕉門の教法形態

梅木 幸吉 (文学部非常勤講師)

虚子の俳論—『俳句に志す人の為に』を中心に—

倉田 紘文 (文学部講師)

国民的抒情詩 俳句とその系譜

ウイルヘルム・グンダート

加藤 一英訳

国語随想・二題

藤沢 一雄 (宮崎県立延岡向洋高校)

教諭

川島つゆ著作目録2—敗戦後から終焉時まで—

古庄ゆき子 (文学部教授)

藤村の詩形態について

米田 貞一 (文学部教授)

正岡子規研究「鶏頭」の一句—その解釈をめぐって—

倉田 紘文 (文学部講師)

「仙人」考—『今昔物語集』を中心として—

安東 大隆 (文学部講師)

大伴坂上郎女「怨恨歌」再考のための覚書

古庄ゆき子 (文学部教授)

高等学校国語科における公害授業者の試み

近藤明義・奈賀玲子 (市立別府商業)

高校教諭

第十七号 昭和五十年十二月

祭神歌—大伴坂上郎女の歌をどうよむか(三)

古庄ゆき子 (文学部教授)

「我許背歯告目」考—雄略天皇御製歌—

藤沢 一雄 (元宮崎県立延岡向洋)

高校教諭

「迷路」における郷土性

米田 貞一 (文学部教授)

補助動詞「ございます」の敬意について

種 友明 (大分大学助教)

古典教育のあり方

指原 宏隆 (県立大分雄城台
高校教諭)

第十八号 昭和五十一年十二月

「迷路」の初稿と改稿―作品の展開と時代について―

米田 貞一 (文学部教授)

大谷大学蔵本『言泉集』の性質

安東 大隆 (文学部講師)

資料 天保九年 正風俳諧連歌宗匠伝授状―翻刻―

倉田 紘文 (文学部講師)

学生レポート

「鼻」小考―そのおかしさをめぐって―

大本 秀美 (国文科二年)

平安女性の自然鑑賞―『枕草子』にあらわれた雪―

米谷 悦子 (国文学科二年)

第十九号 昭和五十二年二月

「姨捨」の系図―棄老説話の一考察

米田 貞一 (文学部教授)

大伴坂上郎女像の変化を追って(二)

古庄ゆき子 (文学部教授)

芥川龍之介とポオ

工藤 茂 (文学部助教)

晩年の高野素十―復刊『芹』時代―

倉田 紘文 (文学部講師)

『言泉集』を成立させる要素

―「孝と追善」・「現世利益」・「勸進」―

安東 大隆 (文学部講師)

第二十号 昭和五十三年十二月

『あすなる物語』の世界

工藤 茂 (文学部助教)

王朝女性の精神的やすらぎ

『蜻蛉日記』に見る道綱母のやすらぎ

米谷 悦子 (国文学科四年)

『和泉式部日記』を通してみる和泉式部のやすらぎ

大塚 直美 (国文学科三年)

『更級日記』のやすらぎ考

安倍佐知子 (国文学科三年)

翻刻 近世勸化本資料(一) (浄土勸化論語)

後小路 薫 (大谷大学助手)

書評 阪下圭八『初期万葉』をよむ

古庄ゆき子

(文学部教授)

伊藤整論

橋本 彰子

(五十四年度卒業生)

第二十一号

昭和五十四年十二月

蜻蛉日記の研究―兼家の立場を通してみた道綱母の嘆き―

安倍佐知子

(九州文化学園教諭)

清濁資料としての近松浄瑠璃(その二)

野口 義広

(文学部講師)

青山光二著『闘いの構図』

木村久近典

(文学部教授)

現代文学における「姨捨」の系譜(一)―太宰治「姥捨」―

工藤 茂

(文学部教授)

「戀乍不有者」考

藤沢 一雄

親鸞聖人の著作にみえる『自然』という語の意味に関して

の一考

安東 大隆

(文学部講師)

第二十三号

昭和五十六年十二月

現代文学における「姨捨」の系譜(三)

―蟻通明神のこと(二)―

工藤 茂

(文学部教授)

近世勸化本資料(一)『浄土勸化論語』翻刻

後小路 薫

(大谷大学助手)

書評 『高野素十研究』倉田紘文著

細川 加賀

(『初蝶』主宰)

唱導文の位置

安東 大隆

(文学部助教授)

中原中也論―その選民意識をめぐって―

高原佐代子

(五十五年度卒業生)

第二十二号

昭和五十五年十二月

詩誌『亜』復刻の意義

倉田 紘文

(文学部助教授)

現代文学における「姨捨」の系譜(二)

―蟻通明神のこと(一)―

工藤 茂

(文学部教授)

書評二題

工藤 茂

『今昔物語集』(卷二十一)にあらわれた宿報の意識

安東 大隆

(文学部講師)

第二十四号

昭和五十七年十二月

現代文学における「姨捨」の系譜(四)―二つの姨捨山―

工藤 茂 (文学部教授)

『御文来意鈔』の成立経緯

後小路 薫 (大谷大学助手)

『蜻蛉日記』の研究―道綱母の物語―

吉永 洋明 (熊本県立高森高校教諭)

説法明眼論(翻刻と訓読)

安東 大隆 (文学部助教)

紹介 阿部正路「天山離離」

工藤 茂

第二十五号

昭和五十八年十二月

井上靖の挽歌観

工藤 茂 (文学部教授)

「すっかり楽しみました」の不自然さ

坂口 頼孝 (文学部講師)

『今昔物語集』巻十六の観音菩薩靈驗譚について

米谷 悦子 (梅光女学院大学)

大学院生

現代俳句論―「第二芸術論」再考―

久保田敏恵 (大分市立碩田中学校)

教諭

第二十六号

昭和五十九年十二月

唱導文学における、説得の仕方

『百座法談』における「何況や」「まして」小考

安東 大隆 (文学部助教)

虚無への誘い 三島由紀夫『美しい星』論

栗栖 真人 (文学部講師)

卒業論文抄録

平家物語の死生観

高野 恵 (五十八年度卒業生)

図書紹介 『万葉群像』北山茂夫著 岩波新書

古庄ゆき子 (文学部教授)

第二十七号

昭和六十年十二月

笑いの文学 ―芥川龍之介への一視点

工藤 茂 (文学部教授)

高野素十研究―「踊子」の句の解釈をめぐって―

倉田 紘文 (文学部教授)

中古日記にみえる、唱導儀式と、そのうけとり方(其二)―

『中右記』にみえる、法華八講について―

安東 大隆 (文学部助教)

日本近代文学の一特質

―『沈黙』と『羅生門』を中心として―

工藤 茂 (文学部教授)

「人びと」と「人たち」の構文的差異

坂口 頼孝 (文学部講師)

「下衆の詞には、かならず文字あまりたり」考

安東 大隆 (文学部助教授)

伊藤整の「火の鳥」論

太田 貴之 (六十年卒業生)

近世末期の唱導論書―『唱導百練鈔』―

後小路 薫 (大谷大学講師)

第二十九号 昭和六十二年十二月

現代文学における「娼捨」の系譜(五) 井上靖「娼捨」

工藤 茂 (文学部教授)

『田舎者』の自己樹立(一)

―大分県における近代化と文学の問題を考える―

古庄ゆき子 (文学部教授)

唱導の範囲―その理解の多様性をめぐって―

安東 大隆 (文学部助教授)

資料紹介『諸供養諷誦文集』付解題 安東 大隆

薨の造形―小説『四角な船』の視点―

工藤 茂 (文学部教授)

『田舎者』の自己樹立(二)

―大分県における近代化と文学の問題を考える―

古庄ゆき子 (文学部教授)

三島由紀夫賞書―『命売ります』をめぐって―

栗栖 真人 (文学部助教授)

資料紹介「説法明眼論」 安東 大隆

(文学部助教授)

第三十号 平成元年十二月

井上靖『四角な船』考―その選ばれた者たちをめぐって―

工藤 茂 (文学部教授)

死亡記事におけるハとガ

坂口 頼孝 (文学部助教授)

資料紹介『石山軍鑑』 安東 大隆

(文学部教授)

第三十二号 平成二年十二月

現代文学における「娼捨」の系譜(六)

― 深沢七郎「檀山節考」―

工藤 茂

(文学部教授)

屎葛の歌―万葉卷十六の歌をよむ

古庄ゆき子

(文学部教授)

複数動作主文におけるハとガ

坂口 頼孝

(文学部助教授)

資料 大分県下刊行文学誌一覧

古庄ゆき子

第三十三号 平成三年十二月

解釈の問題一・二

古庄ゆき子

(文学部教授)

現代文学における「姨捨」の系譜(七)

― 柳田国男「親棄山」―

工藤 茂

(文学部教授)

雁塔聖教序の位置関係における一考察

荒金 信治

(文学部講師)

日本語の中の同字異読

群 英

(中国人留学生)

第三十四号

平成四年十二月

祈雨説法―理に責めて―

安東 大隆

(文学部教授)

津村信夫「鄙の歌」補遺

工藤 茂

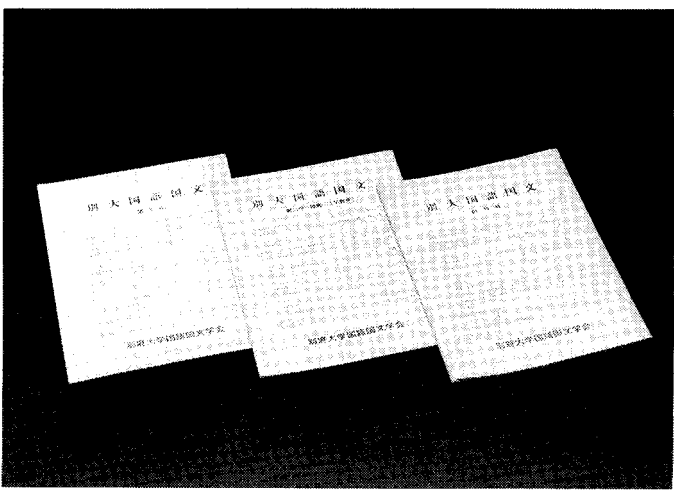
(文学部教授)

平成三年度卒業論文抜粋

井上靖『敦煌』について

海老原早苗

(平成三年度卒業生)



別大 国語国文 創刊号 第2号 第3号